

Namasamguiの研究 -Manjusrikiṛti著 Aryamanjusrinamasamguitikaを中心に-

著者	SUDAN SHAKYA
号	18
学位授与番号	227
URL	http://hdl.handle.net/10097/37015

スダン シャキヤ
SUDAN SHAKYA

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文博第 227 号
学位授与年月日	平成18年9月14日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科(博士課程後期3年の課程) 文化科学専攻
学位論文題目	<i>Nāmasaṃgīti</i> の研究 —Mañjuśrīkīrti 著 <i>Āryamañjuśrīnāmasaṃgīṭīkā</i> を中心に—
論文審査委員	(主査) 教授 桜井 宗信 教授 後藤 敏文 教授 鈴木 岩弓

論文内容の要旨

序論

名前というものには、必ず何らかの意味が込められているものである。名を呼ぶということは、挨拶をするだけでなく、その名の持ち主に何かを求めるという意味まで含む場合があり、そしてそれが神聖だとみなすものに対しての時には、その名を呼びかけるだけでなく、称讃することで、何かを祈り、その力を求めることにつながって行く。

神々を讃嘆する慣習は古代インドにおいても行なわれており、その目的は息災、増益といった種々の功德を得ることであった。古代インドの特定の神格を称讃する仕方は、仏教の中にも取り入れられている。古くは、南方上座部仏教に現在まで伝えられているパリッタ (paritta) があり、その後、諸大乘経典が編纂されるようになると、経典の書写・聴聞と並んで読誦による功德が積極的に説かれるようになる。特に初期大乘仏典の代表とされる『般若経』の中で、般若波羅蜜 (prajñāpāramitā) の受持によって除災などの様々な現世利益を獲得することができると説かれている。更に、後世の大乘仏典においては、経典の内容を凝縮した呪文の形を取った陀羅尼 (dhāraṇī) に発展し、それは初期のタントラすなわち密教経典にも取り込まれ、種々の儀礼と共に、陀羅尼の読誦による無病、延命などの現世利益を説くようになる。そしてタントラの展開とともに、現世利益の範囲に留まらず、無上正等覚を獲得する手段として用いられるまでになった。

本研究で取り上げる *Nāmasaṃgīti* は8世紀初期には成立していたとされている、文殊智慧薩埵 (Mañjuśrījñānasattva) の勝れた特質を種々の名号 (nāman) を以て称讃するタントラである。このタントラは、日本や中国ではほとんど注目されることはなかったが、インド・チベット・ネパールでは大

いに流行し、今日でもチベットやネパールの寺院では常用読誦經典として重用され続けている。この *Nāmasaṃgīti* には、サンスクリット原典、チベット語訳、漢訳が現存しており、比較的、資料に恵まれていると言える。また、サンスクリット校訂本と英訳、和訳が既に出版されている。

14世紀に活躍したチベットの学僧 Bu ston は *Nāmasaṃgīti* を、自身による四タントラ分類（①所作タントラ類、②行タントラ類、③瑜伽タントラ類、④無上瑜伽タントラ類）のうちの④無上瑜伽タントラ系の方便・父タントラに配し、更にその中でも毘盧遮那部族のタントラと見なしている。しかし、このタントラそのものには性的な瑜伽といった無上瑜伽系のタントラに顕著な特徴は見られず、内容及び成立年代から考えて瑜伽タントラ類の『真実撰経』と同系列とみなすことが妥当であるという指摘がなされている。

Nāmasaṃgīti は上述のように分類されてはいるが、その性格は他の多くのタントラ文献とは異なっており、その内容はむしろ、他のインド宗教一般に見られる神格に対する讃嘆形式と類似しているとの指摘がある。また、*Nāmasaṃgīti* は、名号を列挙しそれを称讃することによる功德 (*anuśaṃsā*) を示すことを中心内容としており、特定の思想や儀礼などを説くものではない。そのため、瑜伽タントラ、無上瑜伽タントラなど異なる立場から解説した数多くの註釈書が著されることになり、同時にそれらの註釈に基づいた幾つかの流派が生まれることになった。

Mañjuśrīkīrti 著 *Āryamañjuśrīnāmasaṃgītiṭīkā* (*Ṭīkā*; Tohoku 2534) はその中の一つであり、瑜伽タントラの立場から著された *Nāmasaṃgīti* に対する最も詳細な註釈である。これは遅くとも10世紀前半までには成立していたと考えられる。残念ながら、本書のサンスクリット原典は現存せず、チベット語訳に頼らざるを得ない。また、数多く存在する *Nāmasaṃgīti* の註釈書の中でも Bu ston は特にこの *Ṭīkā* を重要視し、それに対して『要義書』(Tohoku 蔵外5046) という文献を残している。それは彼自身の理解に基づき、*Nāmasaṃgīti* の内容を詳細に分類し要約したものである。

本研究においては、上述した(1)*Nāmasaṃgīti* と(2)*Ṭīkā* の二本を中心資料として使用した。その他 Mañjuśrīkīrti の別の著作 *Gaganāmalasupariśuddhadharmadhātujñānagarbha* (*DhVMV*; Tohoku 2589) をはじめとし、Mañjuśrīmitra 著 *Nāmasaṃgītiṣṭi*, Vilāsavajra 著 *Nāmamantrārthāvalokinī*, *Mādhyamikananda 著 *Āryamañjuśrīnāmasaṃgītipañjikā*, Raviśrījñāna 著 *Amṛtakaṇikā nāma āryanāmasaṃgītiṭippaṇī* などの諸註釈書も必要に応じて参照している。

研究目的

Nāmasaṃgīti の重要性は早くから認識され、ロシアの学者 Minayev によって1887年に最初のサンスクリット原典の校訂が刊行された。しかし、本タントラに関連する資料は膨大な量が存在するにも関わらず、十分な成果が得られているとは言い難い。一方、*Nāmasaṃgīti* の伝統がネパールやチベットの寺院に今日でも継承されているという事実を踏まえるなら、現地調査を行うことで、このタントラの理解を深めることも欠かせないであろう。

Ṭīkā は Bu ston も示したように、*Nāmasaṃgīti* に対する諸註釈書の中でも重要な文献である。そして Mañjuśrīkīrti は「法界語自在マンドラ (*Dharmadhātuvāgīśvaramaṇḍala*)」として広く知られている大規模なマンドラを説いているが、その背景にはいかなる思想があったのかということにも注目すべきである。そういう意味でも、*Ṭīkā* を中心とする註釈研究は必要不可欠なものと言えよう。このように重要なテキストであるにも関わらず、*Ṭīkā* に関しては未だ十分な研究がなされていないのが現状である。

そこで、本研究ではこの *Ṭīkā* の解釈を把握することを通じて *Nāmasaṃgīti* が瑜伽タントラの立場からどのように理解されているかということ、及び、その解釈に見られる思想的及び実践的な特徴を明確に

することを目的とする。また、*Nāmasaṃgīti* 及び *Ṭīkā* が「法界語自在マンドラ」の構成に与えた影響についても考察する。更に現地調査を通じて、とりわけネパールの仏教寺院において伝統として継承されてきた *Nāmasaṃgīti* の読誦及びその背景にある儀礼や図像などについても、明らかにしていきたい。

内容構成

本研究は、以下のように四章から構成されている。

第一章 *Nāmasaṃgīti* について

この章では、*Nāmasaṃgīti* 本文を課題として取り上げ、それについて考察した。先ず、「*Nāmasaṃgīti*」という経題をどのように理解するかという点について、諸註釈者の解釈を通して検討すると共に、*Nāmasaṃgīti* の構成、章分け、その特徴について述べた。また、同タントラの重要性を明らかにするために、それが引用されている諸文献を取り上げている。先にも述べたが、*Nāmasaṃgīti* は文殊たる文殊智慧薩埵を称讃するタントラである。文殊は初期の仏典では菩薩として登場するが、その地位は後世になるに従って次第に上昇し、やがて最高位の尊格とされるに到った。その点に注目しつつ、大乘經典からタントラ文献までに登場する文殊を取り上げて考察する。

諸註釈者による解釈を踏まえると、文殊智慧薩埵の特質を種々の「名号 (nāman)」を以って「称讃 (saṃgīti)」したものが *Nāmasaṃgīti* である。「名号」を具体的にどう解釈するかは、註釈者それぞれの立場によって異なっているものの、その名号を誦えることに「仏性を獲得する」という功德があるという解釈は皆同じである。更に、*Nāmasaṃgīti* の重要性は Bu ston や Tāranātha の諸歴史書をはじめ、*Kudṛṣṭinirghātana*、*Ādikarmapradīpa*、*Vimalaprabhā* に見られる多くの記述からも伺える。特に *Vimalaprabhā* は「最勝たる本初仏を知らない者は *Nāmasaṃgīti* を知らない。*Nāmasaṃgīti* を知らない者は持金剛 (vajradhara) の智身 (jñānakāya) を知らない。持金剛の智身を知らない者は真言乗 (mantrayāna) を知らない。」云々と説いて、*Nāmasaṃgīti* の重要性を示している。また、周知の如く、*Nāmasaṃgīti* は *Kālacakratāntra* の成立において典拠とされている。特に *Kālacakratāntra* の註釈書である *Vimalaprabhā* は、そのタントラを解説するために *Nāmasaṃgīti* の数多くの偈頌を援用している。

Nāmasaṃgīti の称讃の対象である文殊たる文殊智慧薩埵は、純粹に大乘的な菩薩であり、弥勒と共に大乘仏典において重要な菩薩であり、出家菩薩の上首とされている。諸大乘仏典において、文殊菩薩は一切仏・菩薩の母として解釈されており、それと同様の表現は *Ṭīkā* も用いている。

一方、『大日経』をはじめとする諸タントラ文献における文殊を纏めてみると、最初には眷属の一人として登場し、次第に優れた菩薩として扱われるようになることが分かる。タントラ文献の中でも、この文殊智慧薩埵の特質を八百以上の異名を以て称讃し、「本初仏 (ādibuddha)」として解釈したものが当該の *Nāmasaṃgīti* である。このように、文殊を仏・菩薩の母とする諸大乘仏典の解釈を踏まえると、文殊を「本初仏」として解釈する素地は既に大乘仏典で出来上がっていたものと考えられる。そうした流れを汲む *Nāmasaṃgīti* は、文殊を頂点に置き「本初仏」として進化させたタントラであると言える。

第二章 *Mañjuśrīkīrti* と *Āryamañjuśrīnāmasaṃgītiṭīkā* について

本章では、Bu ston 著『瑜伽タントラに入る船』や Tāranātha 著『インド仏教史』などの記述を手がかりに、あまり知られていない *Mañjuśrīkīrti* の人物像を紹介した。それらの記述によると、*Mañjuśrīkīrti* は Ānandagarbha と同じ師匠を持つ者とされ、特に両者が説く儀礼の特徴が共通している。また、*Mādhyamikananda は *Āryamañjuśrīnāmasaṃgītipañjikā* (Tohoku 2540) を著しているが、その内容を調べた結果、これが *Mañjuśrīkīrti* の *Ṭīkā* の流れを汲んだ文献であることが判明した。但し、今回はその指摘のみに留め、詳細な考察は今後の課題とする。

また、Mañjuśrīkīrti が *Ṭīkā* において、それまでの *Nāmasaṃgīti* の章分けを用いておらず、独自の「内容分け」をしていることも特徴の一つである。それらの「内容分け」に「表題」をつけると六十六に及ぶ。そこで、それらの「表題」を中心に *Ṭīkā* の解釈の要点を纏め、全体像を概観した。また、Mañjuśrīkīrti は *Nāmasaṃgīti* を解説する際、『無尽意經』、『解深密經』、『真実摂經』、『根本中論頌』などの種々の文献を引用している。Mañjuśrīkīrti はそれらの引用文献によって *Nāmasaṃgīti* に思想的及び儀礼的な意味付けを行なっているのである。

第三章 *Āryamañjuśrīnāmasaṃgītiṭīkā* に見られる思想及び実践的な解釈の特色

この章では *Ṭīkā* に見られる Mañjuśrīkīrti の思想的及び実践的な解釈の特徴について考察した。特に、六部族、般若輪の観想、本初仏、功德、法螺貝の三摩地といった内容に注目すると共に、*Ṭīkā* と『真実摂經』の関係を検討した。

その結果として、まず、*Nāmasaṃgīti* 第25偈に見られる Mañjuśrīkīrti の註釈の特徴として、「不二」という言葉を波羅蜜理趣と真言理趣という両方の立場から註釈していることが挙げられる。また、「不生」についてであるが、Mañjuśrīkīrti は毘婆沙師をはじめとする諸論者によって代表される「依他起の法則によれば、勝義として生起する」という主張を不合理であると述べ、『解深密經』に含まれている中観的な記述を典拠として、「依他起の法則によれば、勝義として生起はない」と立証している。更に、十項目の「事物としての因と果の生起」の仮定を行ない、いずれも不合理であることを証明する。Mañjuśrīkīrti の説明方法を見る限り、Bhāviveka や Candrakīrti の著作からの引用があるものの、彼自身の思想が自立論証法によるものか帰謬論証法によるものなのかは、確定し得ない。Nāgārjuna の論法をそのまま使用していることから、中観派思想に基づいた説明であると言えるのみである。いずれにせよ、Mañjuśrīkīrti が *Nāmasaṃgīti* を理解する際、その背景に置いていた彼の思想が「中観派」であることが、明らかとなった。

続いて、*Nāmasaṃgīti* 第23-27偈の五つの偈に対する Mañjuśrīkīrti の註釈を見ると、六部族あるいは六真言王の解釈は、六部族の構成を説く *Vilāsavajra* のそれと比較しても解釈の詳細さに乏しいと思われることから、「菩提心金剛部族」を含む「六部族」そのものの思想を彼が重要視していたとは考え難い。また、『無尽意經』をはじめとする『解深密經』、『根本中論頌』などを援用して註解を進めるという Mañjuśrīkīrti のやり方は、彼の註釈の一大特徴である。更に、「般若輪の観想」の中で、a, ā などの十二文字にそれぞれの意味を持たせ、更に十二の地と波羅蜜とに配分していることも他の註釈書には見られない。それを踏まえて、文字鬘や月輪の観想より一切智智を獲得することを説明し、最後に、八輻の六つの輪の解説に及んでいる。

さて、Mañjuśrīkīrti は *Ṭīkā* において『真実摂經』の題名を挙げて引用はしていないが、多くの箇所でも典拠として用いていることは明白である。*Ṭīkā* には五如来または五仏・五智・五現等覚の真言・百字真言など、『真実摂經』関連の内容が多く見られる。『真実摂經』と *Nāmasaṃgīti* の決定的な違いとして、『真実摂經』では大毘盧遮那如来が主尊で、そこからすべての仏世尊が出生するのに対し、*Nāmasaṃgīti* では大毘盧遮那如来をはじめとし、あらゆる仏・世尊の特質を備えているのが文殊智慧薩埵であるとしている点が挙げられる。それを踏まえて考えると、この *Ṭīkā* は『真実摂經』での形式はそのままにして、五仏・五智・五身を自性とする主尊を大毘盧遮那如来に代えて文殊智慧薩埵として組織したものであることがわかる。

Nāmasaṃgīti には文殊智慧薩埵の異名の一つとして「本初仏」がある。一方、自然生 (svayambhū) ・無始無終 (anādinidhana) ・一切仏達を生み出す者 (janakaḥ sarvabuddhānām) ・生処のない者 (ayoni) などの異名にも「本初仏」の意味合いが含まれていると考えられる。Mañjuśrīkīrti は『理趣広經』を援用し、金剛薩埵

または持金剛を「本初仏」として解釈するだけではなく、「一切仏達を生み出す者」を、諸大乘經典が説くように「一切仏を生み出す御母」として解釈している。上述した諸概念を踏まえた Mañjuśrīkīrti の「本初仏」理解は、「他の因によらず自分で生ずるもの」つまり、法界を自性とするものであるから生まれる原因を持たない。そのために「始まり」も「終わり」も無い。すなわち「本初仏」は法身を自性とする無始無終のものであると言える。Nāmasaṃgīti にこの「本初仏」を意味する言葉が多く存在していることが、Kālacakratāntra の成立において、その典拠の一つとされている理由と考えられよう。

Nāmasaṃgīti 第78偈を解釈する際に Ṭīkā が説く「法螺貝の三摩地」は、Nāmasaṃgīti 第25-27偈の解説の際に説く「般若輪の観想」と並んで Mañjuśrīkīrti が示す重要な儀軌である。Ṭīkā より後世に著された Grags pa rgyal mtshan 訳の『成就法的大海』という成就法集がこの儀軌の部分だけを抜き出し、独立した儀軌として収録している。このことから、Ṭīkā に説かれている「法螺貝の三摩地」が重要な儀軌として流布していたことが伺える。

Nāmasaṃgīti の本文でも説かれているように、このタントラを誦める回数は一日三回すなわち初夜(未明)、日中(朝)、後夜(昼)の三時である。Nāmasaṃgīti には読誦によって得られる諸功德が説かれているが、それらの功德には、世間的なものと出世間的なものの両方が見られる。つまり、Nāmasaṃgīti を読誦することによって、日常生活に起こり得る困難や恐怖などから解放されるという世間的なものと共に、悟りに到るという出世間的なものが得られると説く。そのような種々の功德が積極的に付加されている背景には、Nāmasaṃgīti を広く流布させる目的があったと考えられる。

一方、儀軌に関する Mañjuśrīkīrti の別の著作に DhVMV がある。本書は「虚空の如く無垢であり極めて清浄な法界の智の心髄という大マンダラ」という長大な名称を持つ大規模なマンダラを説いているが、これは後に「法界語自在マンダラ」という名称として広く知られるようになったと筆者は考える。その背景には Mañjuśrīkīrti より後に活躍した Abhayākara Gupta (11-12C) の著作である Niṣpannayogāvalī 第21章「法界語自在マンダラ (Dharmadhātuvāgīśvaramaṇḍala)」の影響が大きい。また、このマンダラに配置される諸尊格名が Ṭīkā で登場するそれらと多く共通することが明らかとなった。

第四章 ネパールにおける Nāmasaṃgīti

Nāmasaṃgīti はネパールでは広く親しまれているタントラであり、それを読誦する伝統が今日でも続いている。従って、Nāmasaṃgīti のより深い理解のためには、残されている読誦の伝統を理解することも欠かせないであろう。本章においては、Nāmasaṃgīti に関するネパール寺院の現地調査の成果を紹介した。また、一面十二臂「ナーマサンギーティ文殊」図像の考察及び Amṛtānanda 著 Dharmakośasaṃgraha に説かれているその図像を解説する部分のサンスクリット校訂本を紹介し、和訳を示した。このように本章では、ネパールで独自に発展した Nāmasaṃgīti の伝統について述べ、それを読誦する意義について考察した。

Nāmasaṃgīti は10-11世紀に著わされた Kudṛṣṭinirghātana や Ādikarmapradīpa などの文献においても読誦用經典として登場するが、早朝から読誦を行なう伝統が今日までネパールのバーハーやバヒーと呼ばれる寺院に継承されているという事実は注目に値する。Nāmasaṃgīti はネパールにおいて伝統を受け継ぎつつ常用經典として流布し民衆に親しまれてきただけでなく、更に独自の発展をも遂げているのである。ネパールに現存する一面十二臂の「ナーマサンギーティ文殊」は、まさにそれを物語っている。他方、同地には大きく分けて二種類の「ナーマサンギーティ文殊」の図像が存在することを示した。その「ナーマサンギーティ文殊」の図像の解説は、Niṣpannayogāvalī、Sādhanaṃālā などの文献には確認できず、Amṛtānanda が著した Dharmakośasaṃgraha のみに確認できる。しかし、「ナーマサンギーティ文殊」の作例は Amṛtānanda の活躍年代(19世紀前半)以前にも存在することから、その図像がどのように発展を遂

げていたのかは今のところ明らかではない。

Nāmasaṃgīti は読誦のみならず、写経したり他者に説いたりすることによって計り知れない功德が得られると伝えられているため、ネパールでは僧侶はもちろん在家の人びとの間にも、暗誦したり写経したりする習慣が維持されてきた。その様な功德が期待されるため、「ナーマサンギーティ文殊」を前にしてはもちろん、仏塔、バーハーやバヒーの本尊、そして、ジャートラー (*jātrā*) と呼ばれる観音の祭にその山車の前で *Nāmasaṃgīti* が誦えられることも多い。更に誕生日などのいろいろな記念日や葬儀の際にも読誦される習慣がある。その読誦の伝統は、主に、ナーマサンギーティ・グティ (*guṭhi*) のグティヤール (*guṭhiyāra*) たちによって受け継がれてきたと考えられる。

Nāmasaṃgīti がネパールにおいてこれほど親しまれているなら、「ナーマサンギーティ文殊」を本尊とする寺院があっても不思議はないはずである。しかし、そのような例は存在していない。それは「ナーマサンギーティ文殊」が、様々な仏菩薩の功德を集約している姿であるからだと考えられる。

本章の最後においては、文殊菩薩や *Nāmasaṃgīti*、そして「法界語自在マンドラ」が、歴史的な事実や伝説と入り混ざって一緒に登場するエピソードを伝えている *Svayambhūpurāṇa* についても触れ、その重要性を指摘した。

結論

以上に述べてきたように、*Nāmasaṃgīti* は文殊たる文殊智慧薩埵の特質を種々の「名号 (*nāman*)」を以って「称讃 (*saṃgīti*)」するタントラである。それらの名号は単なる名前ではなく、仏教に関する多くの基本的な概念を含んだものであり、かつ諸功德が具わったものでもある。それ故に、諸名号を正しく称讃するだけで、無病息災といった種々の現世利益から無上現など覚までの功德 (*anuśaṃsā*) が得られると説く。このように得られる功德に焦点を当てると、本タントラの構成は「因果」の関係にあると言える。つまり「因」たるものが様々な性質を備えた文殊智慧薩埵の称讃であり、「果」たるものが、こうした諸功德なのである。

また、*Nāmasaṃgīti* には特定の思想や儀礼などが説かれてはいないが、それは裏を返せば様々な解釈の余地があるということであり、このような柔軟性の故に、稀とも言えるほど異なる立場からの解釈が行なわれている。

本研究の中心テキストとして用いた *Mañjuśrīkīrti* 著 *Ṭikā* は、*Nāmasaṃgīti* に思想的及び儀礼的な意味合いを与えるために、『解深密経』、『無尽意経』、『真実撰経』といった諸経典と共に、『根本中論頌』などの諸論書を援用しているが、それらの文献の扱い方から、彼が顕教と密教両方に通じる学僧であったことが知られる。

Ṭikā における *Mañjuśrīkīrti* の註釈の仕方を見ていくと彼の思想的な基盤が「中観派」にあることが分かる。また、*Ṭikā* において、「般若輪」及び「法螺貝の三摩地」といった彼独自の観想法、特に「法螺貝の三摩地」とほとんど同じ内容が、*Sādhanaṃālā* に「成就法」(*SM*No.81)として収録されている。この「成就法」は、Grags pa rgyal mtshan 訳『成就法の大海』が編纂される時点で、*Ṭikā* から「法螺貝の三摩地」の部分だけが抜き出され独立した儀軌 (Tohoku 3474) として扱われた結果である可能性が強い。以上が *Ṭikā* における特徴的な記述であり、*Nāmasaṃgīti* に思想的及び儀礼的な意味付けを行なう仕方の一端である。また、「法螺貝の三摩地」もそうであるように、*Ṭikā* 全体の解釈の仕方を見ると、*Mañjuśrīkīrti* は言葉 (*vāc*) を重視して解釈する傾向があると言える。そのような傾向が *Mañjuśrīkīrti* の著した「法界語自在マンドラ」として広く知られているマンドラの解説文献である *DhVMV* にも、色濃く反映されていることも明らかになった。

Nāmasaṃgīti を読誦する習慣は、今日でもネパール・チベットにおいて寺院だけでなく民衆の間にも広く流布しており、毎日読誦されている。本研究のために行なった現地調査の成果の一つとして、ネパールにおいて *Nāmasaṃgīti* は、*Kudṛṣṭinirghātana* や *Ādikarmapradīpa* が説くように、早朝から読誦するという伝統を維持しながらもネパール独自の発展を遂げていることが挙げられる。また一面十二臂の「ナーマサンギーティ文殊」の図像もそのような一例として指摘できる。

以上が本研究によって明らかになった主な点である。今回は特に、瑜伽タントラの立場から著された *Mañjuśrīkīrti* の *Ṭīkā* を中心に論を展開してきた。今後は、「法界語自在マンドラ」として広く知られている「虚空の如く無垢であり極めて清浄な法界の智の心髄という大マンドラ」を説く *Mañjuśrīkīrti* の別作 *DhVMV* のマンドラの構成、マンドラ儀軌の具体的な内容について研究を進め、「法界語自在流」全体を解明することを課題としたい。また、新旧の「法界語自在マンドラ」を含む多くの作例が今日にまで存在しており、現地調査によるその変容と展開についての考察もまた必要となるであろう。特にネパールにおいては今日でもそのマンドラが「マンドラ台」の形で建立されている。そのために用いられている修習法次第などの精査によって、未だサンスクリット原典が発見されていない *Ṭīkā* や *DhVMV* の原典の回収の可能性も皆無ではない。そのため、特にネパールにおける現地調査を通じて同マンドラ信仰の具体像の探求に努めたい。また、一面十二臂の「ナーマサンギーティ文殊」の変容または発展がネパール独自のものであったとすれば、その経過の解明も必要である。これは長い年月をかけてネパールの社会に浸透している点から、この地域の文化や習慣の研究には欠かせない。これも筆者の今後の課題である。

更に、*Mañjuśrīkīrti* が *Ṭīkā* に最も多く引用しているのは『無尽意経』であるが、それに関する研究があまりなされていない。今後、*Ṭīkā* に用いられている『無尽意経』の内容を考察し、その意義を明確にすることも課題となる。他方、*Nāmasaṃgīti* には瑜伽タントラ以外の立場からの註釈が存在することから、それらの研究も進め、*Nāmasaṃgīti* の解釈がどのように展開してきたのかを明らかにする必要がある。こうした研究は仏教タントラ、ひいては仏教そのものの思想および儀礼の展開の解明にも繋がるものと筆者は考える。

論文審査結果の要旨

本論文は、後期インド密教史上の重要経典 *Nāmasaṃgīti*、及び *Mañjuśrīkīrti* が著した同経の註釈書 *Āryamañjuśrīnāmasaṃgītiṭīkā*（以下 *Ṭīkā*）を基礎資料として、*Ṭīkā* の所説を文献学的操作によって吟味することにより、*Nāmasaṃgīti* を瑜伽タントラとして解釈・受容する方軌の具体像を解明しようとしたものである。

本論文は「序論」、第一章から第四章までの本論、「結論」、及び「文献表」・「付録」から構成されている。

「序論」では、先ず仏教タントラ全体における *Nāmasaṃgīti* の位置付けを先行研究に基づいて論じ、同経本来の性格は瑜伽タントラであることを確認する。続いて考察対象である *Nāmasaṃgīti* 及びその解釈体系に関する先行研究を概観した上で、膨大な文献資料が見在するにも拘らずそれに対応するだけの十分な研究成果の蓄積が無く、従って瑜伽タントラ・無上瑜伽タントラ両様に受容されたという *Nāmasaṃgīti* の最も基本的な特徴に関しても考察が不十分であること、一方で同経の信仰伝統がネパール・チベットでは継承され続けていることから、その現地調査を行うことが有益であることを指摘する。そして以上のような状況を踏まえて、本論文の研究目的が *Ṭīkā* の解釈に基づいた「瑜伽タントラとしての *Nāmasaṃgīti*」の受容形態を明らかにすること、*Ṭīkā* とネパール仏教において重用される法界語自在マンドラとの関係を考察すること、更には現代ネパール仏教において *Nāmasaṃgīti* の信仰伝統がどのよ

うに存続しているかを現地調査の結果を踏まえて論ずることにあると述べる。

第一章〈*Nāmasaṃgīti* について〉では、第二章以下における考察の前提と為すべき *Nāmasaṃgīti* 自体に関する幾つかの論究を行っている。まず、同経が瑜伽タントラ・無上瑜伽タントラ両階梯で解釈され独自の流儀が伝えられてはいるが、同経本来の性格としては瑜伽タントラと理解すべきであること、同経が至尊文殊智慧薩埵への称讃とその功德のみを説く、一般的な密教經典とは異なる独特の内容形式を取っていることを確認する。また、その現行テキストの多くに見られる“全体を十四章に区分する在り方”が、同経本来の形態ではなく註釈者の工夫によるものであることに言及し、その証左の一つとして *Ṭīkā* が示している独自の「内容分け」を提示する。そして *Nāmasaṃgīti* が後期インド密教界において重要視されていたことに触れ、同経の知識の有無が学識者であるか否かを判断する基準であったこと、行者が毎日実践すべき行法の一つとして同経の読誦が含まれていることなどの具体的事例を、Advayaṣastrya や Bu ston 等の言及に基づいて明らかにしている。

一方 *Nāmasaṃgīti* は文殊を単なる中心仏として称讃対象としたのみならず、それを「本初仏」と規定している。このこと自体は夙に知られた事実であり、また先行した大乘經典において既に文殊を「諸菩薩の父母」と見做す理解があつて、それが同尊を「本初仏」とする解釈へと繋がることの指摘も先行研究において為されている。論者は、その点を資料に即して改めて確認した上で、更に『理趣広経』・*Trailokyavijayakalpa* の2密教經典を考察対象に加え、両経に共通して“文殊を曼荼羅の中尊に置き儀礼を実践することで、無上正等覺の獲得等の功德が得られる”という *Nāmasaṃgīti* の所説とよく対応する規定が見られることを述べる。これは、同経の文殊観が成立する道筋をより具体的に探る上で、貴重な資料となり得るものである。

第二章〈*Mañjuśrīkīrti* と *Āryamañjuśrīnāmasaṃgītiṭīkā* について〉では本論文の中心資料である *Ṭīkā* の内容構成と、その著者である *Mañjuśrīkīrti* の人物像を明らかにしている。まず Bu ston が紹介する彼の伝説的事蹟を紹介し、その全てを史実とすることは出来ないものの Anandagarbha の法兄弟であるという伝承に注意すべきであり、その場合10世紀前半頃を活動年代と考え得、またこの法兄弟であるとの伝承を裏付けるように、両者の示す観想次第が〈三種三摩地〉を基本構成とする点で共通点を有する、とする。また“*Mādhyamikananda* という経歴不詳の人物が著した *Mañjuśrīkīrti* 註 (Toh 2540; Ota 4831) が、内容上 *Ṭīkā* の要約と見做し得る”という指摘も論者によって新たに確認された知見である。

続いて *Ṭīkā* の全体像が、詳細な科段表、及びそれに従って進められる要約的記述によって提示される。*Mañjuśrīkīrti* は *Ṭīkā* を著す際に「A を説明するために B を説く」という形式で *Nāmasaṃgīti* 本文の有する意味内容を示しているが、これに注目した論者は「A」の部分が同経に対して彼が与えている目次に相当することを発見し、それを抜き出す形式で *Nāmasaṃgīti* 科段表を作成する。これはまたそのまま *Ṭīkā* の目次でもあり、論者はこれに沿って同書の記載内容を要略している。この「要略」では、特に *Ṭīkā* の引用する諸典籍の確定に意が用いられているが、これは *Mañjuśrīkīrti* が *Nāmasaṃgīti* の記述を解釈する際に何を根拠としていたかを考究する上で重要な起点となるものであり、論者自らが「結論」において触れている通り、今後の発展的研究が期待される点である。

第三章〈*Āryamañjuśrīnāmasaṃgītiṭīkā* に見られる思想的及び実践的な解釈の特色〉はその内容から見て本論文全体の核心を成す部分であり、*Mañjuśrīkīrti* が *Nāmasaṃgīti* を解釈する上で拠り所の一つとした顕教上の立脚点を明らかにすると共に、彼が儀礼実践に関わる事項を中心とした密教上の諸概念を、どのように *Nāmasaṃgīti* と結び付けているかを論じ、同経を瑜伽タントラとして解釈する仕方の具体像を描出しようとしている。

まず同経第25偈の‘advaya’・‘anutpāda’に対する註釈を取り上げ、そこで確認される教証と理証の両面

から、Mañjuśrīkīrti の立脚点の中観思想にあったことを論証する。これは“波羅蜜理趣と真言理趣との相互関係を探る”という後期インド密教研究上の重要課題に対して有益な視座を与える、貴重な指摘と言える。

Nāmasaṃgīti に則った儀礼を行う場合に基本的な枠組みとして重視されるのが菩提心金剛部族以下の〈六部族〉の概念である。これは Mañjuśrīkīrti に先立つ Mañjuśrīmitra の文献で既に取られている仕方であり、彼の弟子である Vilāsavajra にも受け継がれた。しかし論者は、Mañjuśrīkīrti がこれに全く関説せず、『真実撰経』以来の〈五部族〉体系による解説を行っていることを指摘し、“*Ṭikā* は『真実撰経』における主尊大毘盧遮那の属性を全く変えずに、そのまま *Nāmasaṃgīti* の主尊文殊智慧薩埵として解釈している”とする。また、同じく Mañjuśrīmitra や Vilāsavajra が独特の観想法を指示する〈幻化網現等覺次第〉についても、‘a, ā · · aṃ, aḥ’の十二母音を信解行地より仏地に到る十二地に対応させたうえ、いわゆる〈六真言王〉の文字を用いた「般若輪の観想」と呼ばれる文字鬘と月輪を用いた一連の瞑想法を指示し、前者2人のような《大毘盧遮那→本初仏→般若輪→智慧薩埵》と次第する重層的瞑想に全く関説しないことを確認している。瞑想内で「本初仏」に言及しないことはそれを独立した尊格として扱わない立場を示唆するが、論者はこの点も確認している。即ち Mañjuśrīkīrti は‘svayaṃbhū’・‘anādinidhana’・‘paramādyā’などの語は「本初仏」の同義語であり、それらが全て金剛薩埵・持金剛を意味する、と解釈しているという。

その一方で Mañjuśrīkīrti は、第78偈に含まれる‘dharmaśaṅkha’という語に関連して〈法螺貝の三摩地〉と呼ばれる独特の観想法を説いている。これは文殊・阿弥陀・法螺貝を瞑想対象とすることで言語能力に関わる悉地を成就しようとするものであるが、論者は、これが Mañjuśrīkīrti 独自の観想法であり、しかも独立した成就法として *Sādhanaṃālā* に収載されていることを指摘している。密教儀礼実践面で Mañjuśrīkīrti がどのような活動を行っていたかを具体的に知ることの出来る重要な発見であるが、今一つ彼と密教儀礼との関わりという観点から見落とせないのが「法界語自在マンドラ」である。同マンドラが彼の流儀（法界語自在流）に固有であるとの事実は夙に著名であったが、それを文献上の記述に位置付ける試みは為されてこなかった。本章において論者は、*Ṭikā* と並ぶ Mañjuśrīkīrti の代表作『マンドラ儀軌』（Toh2589；Ota3416）をも検討し、元来このマンドラは「虚空の如く無垢であり極めて清浄な法界の智の心髄という大マンドラ」と呼ばれるもので、Mañjuśrīkīrti が *Nāmasaṃgīti* 第115偈の一節‘sarvabuddhamahāgarbha’を根拠として案出した可能性がある」と述べる。そしてそれが「法界語自在マンドラ」と呼ばれるに到ったのは Abhayākara Gupta 以降のことであるという。

第四章〈ネパールにおける *Nāmasaṃgīti*〉では、論者の母国であるネパールの現代仏教界において *Nāmasaṃgīti* がどのように扱われているかが、論者自身による現地調査の結果を踏まえて述べらる。それによれば、同経は寺院において毎朝行われる本尊洗顔式の際に唱えられるほか、朝夕の勤行で読誦する寺院も多いことが確認される。また葬儀や各種記念日に読誦する習慣もあるという。これら読誦の場面で中心的な働きをするのが〈講〉に相当する「グティ」という組織であり、これに属する人々（「グティヤール」）が儀礼の準備や経頭の役割を果たすという。

なお、論者自身は余り成果を強調していないが、「結論」の後に置かれた「付録」の7において、*Ṭikā* 所引の *Nāmasaṃgīti* テキストと同経現行本（梵蔵）とが殆ど相違なく一致している事実を示していることは、同経の流布・流伝状況を明らかにして行く上で重要な押さえ所となる。一般にタントラの註釈書が引用するテキストはその現行版と異なっていることが多く、今のような例はむしろ稀である。*Ṭikā* が同経現行テキストの成立に何らかの関わりを有した可能性も考えられよう。

このように、本論文ではインド密教史を解明して行く上で新たな基盤となる有益な新知見が多数提示

されており、総じて斯学の発展に寄与する優れた成果として評価し得る。

よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。